

〔論文〕

# 「夢の世界は現実であり実在している」ことを認める 多元的実在論の考察

——「生と死の境界」の夢の事例をめぐって

坂井祐円

SAKAI Yuen

## 1. はじめに

「現実」とは何だろうか。こうした問いは、大抵は哲学的な問題として提起されるわけであるが、日常生活の中にあってもふと疑問に感じることがある。一つには、現実逃避といった状況の中で問われてくるときである。この場合の逃避したくなる現実というのは、何か不快な出来事、苦しい状況、義務的にやらなければならない事柄などを指している。そこで、他の楽なものに逃避している間は多少の気休めになるが、いよいよその現実に向き合わなければならないときになると、「こんな現実なんて嫌だ！ いったい現実って何なのだろう」と自分に問いかけるのである。もう一つは、あまりにもリアルな夢から目覚めたときである。このとき目覚めた自分の状況や周囲を確認してみると、そこにある現実と照らし合わせることで、「ああ、夢だったのか」と振り返るわけであるが、その夢の世界の感覚は目覚めたときの現実感覚と区別がつかずにいる状況であることから、「あれは本当に夢だったのか、ひょっとすると現実にあったことなのでは!? そもそも現実とは何なのだろう」と考えてしまうのである。

両者はともに現実とは何かと問いながらも、実際に問われている内容は、それぞれ性質が異なるように見える。精神科医で哲学者の木村敏が、「現実」には「リアリティ (reality)」と「アクチュアリティ (actuality)」の二つの区別があると分析したことはよく知られている<sup>1</sup>。二つの現実を語源から探っていくと、「リアリティ」は、事物という意味をもつラテン語の *res* に由来し、事物的・対象的な現実、私たちが勝手に作り出したり操作したりできない既成の現実を指す場合に用いられる。これに対して「アクチュ

---

1. 『木村敏著作集6』「心の病理を考える」弘文堂・2001年、p. 260 (『心の病理を考える』岩波新書・1994年)

アリティ」は、ラテン語で行為、行動を意味する *actio* に由来しており、現在只今の時点で途絶えることなく進行している活動中の現実、対象的な認識によっては捉えることができず、これに関与している人が自分自身のアクティブな行動によって対処するほかないような現実を指している<sup>2</sup>。

この二つの現実の区別について、木村は近世のイタリアの人文主義哲学者ヴィーコが示した「クリティカ」と「トピカ」という認識様式の違いを引用しながら説明を加えている<sup>3</sup>。まずクリティカとは、「所与の個別的对象に対して分別理性をはたらかせ、その真理性について判断を下す技術」であり、これを対象認識的な個別感覚と呼ぶ。これに対しトピカは、「多くの所与を総合的に概観してそれらのあいだにはたらいている意味連関を発見し、問題の所在＝トポスがどこにあるかを見抜く技術」であり、これは直感的認識としての共通感覚と呼んでいる。これらを受けて、リアリティとは主としてクリティカによって判断しているような現実であり、アクチュアリティはトピカを働かせてその生命的・実践的な意味をキャッチしているような現実である、と述べている<sup>4</sup>。

要するに、リアリティとは「個別感覚に依拠して理性的思考によって構想される現実」であり、アクチュアリティとは「共通感覚に依拠して身をもって経験することによって構想される現実」ということになるが、ここから一つ目に挙げた現実逃避の末に向き合わざるを得ないと感じられる現実とはアクチュアリティを問題にしており、二つ目の夢から醒めた後に確認される現実とはリアリティを問題にしている、とひとまず言えそうである。とはいえ、問題はそう単純でもないように思われる。

まず一つ目の現実逃避 (escape from reality) から問われてくる現実とは、いったんリアリティとして把握された事柄に対して、これをアクチュアリティとして受け止めることによって、どのように対処するのかを問うているのである。そして、もう一つの夢から目覚めた後で問われる現実とは、夢の中でそれこそ身をもって経験したアクチュアリティの感覚が、覚醒した後の理性的に把握されるリアリティの世界にあってもなお継続していたことにより生じた疑問であり、つまりはアクチュアリティに対比された形でのリアリティが問題になっているのである。このように考えていくと、現実というのは、リアリティとアクチュアリティとが交互に重なり合うことで構想される世界である<sup>5</sup>、と

---

2. 前掲書、p. 260

3. 前掲書、p. 251

4. 前掲書、p. 260

5. 「構想される」とは「構想力」のことであるが、これについて木村は、ヴィーコがインゲニウムと呼んだ意識のはたらきのことであると述べ、これはファンタジア＝想像力のように過去の経験の記憶を思い浮かべることで生み出すことは異なり、目の前にある感覚的所与の背後に広がる生命的な意味を直接に見出す作用であると分析している (前掲、p. 253)。ファンタジアによって生み出されるものには精神疾患としての妄想も含まれる。つまり、構想される現実とは異なるという

捉えることができるわけである。

しかし、そうだとすると、ここからさらに次のような疑問が湧いてくる。そうした現実には果たして実在していると言えるのだろうか、もしくは実在と対応しているのだろうか。ちなみに、「実在」という概念もまた reality の訳語として用いられることがある。とはいえ、「現実」と「実在」ではやはり意味が異なると言うべきだろう。「現実」とは、言うなれば、認識される表象的世界（リアリティ）、あるいは実感される意味的世界（アクチュアリティ）のことであるが、一方の「実在」とは、認識されるかどうかに関わりなく、そこに独立して存在している世界を指している。つまりは実際存在という意味であるが、これは本質（essence）をもち、実体（substance）を伴っている。英語の表現では being, presence, existence に相当し、主には外的対象としての事物や人物に向けられている。人間存在に向けられる場合、とくに主体が問題になるときは「実存（existence）」という用語になる。

そこで、現実の世界は実在している、と言えるのだとすれば、これはリアリティとしての現実を指していることになる。ならば、アクチュアリティとしての現実には実在しているのかと言えば、これは主観的な内面世界を含んでおり、厳密には実在の範疇に入らないのではないかと考えてしまうかもしれない。実際には、現実にはリアリティとアクチュアリティの相互の重なり合いによって構想されて成立しているのであるから、すべての現実には実在性があるとも言えるのではないか。しかしながら、実感としての夢の現実が覚醒時の現実とどれほど区別がつかないからといっても、これを実在性があると言ってしまってよいものだろうか。夢はあくまでイマジネーション（想像力）の産物なのであって、そこには本質も実体もないのではないか。

次節では、夢の現実ということ意識しつつ、現実それ自体の実在性をめぐって、二つの実在論を提示し、これら対比しながら考察を深めてみたいと思う。

## 2. 素朴実在論と多元的実在論

この世界は独立して存在しており、個々の事物は私の見えたまま感覚するままに実在している。こうした世界理解のあり方を、哲学の用語では「素朴実在論（naive realism）」と呼んでいる。私が誕生するというのは、独立したこの世界のある場所に、ある時点で、一つの個体（肉体）が発生するということであり、私が死ぬというのは、この世界のある時点で、一つの個体（肉体）が消滅するということである。この世界は、私が生まれる以前にも存在していたし、死んだ後にも当然続いていく。私が認識しているかどうかに関わりなく、この世界は変わらずに存在している。基本的に私たちは、こ

---

ことを強調している。

のような見方を常識的な世界観とし、感覚的に受け入れている。これが素朴実在論である。これはまた、私たちがいわゆる「現実」として捉えている事態でもある。

しかし、素朴実在論の現実というのは、本当にそのまま額面通りの現実として理解してよいのだろうか。デカルトが、この世界の实在性を可能な限り徹底的に疑ってみた先に、「私が考える (cogito)」ことだけは疑い得ない事実であると気づいて、「われ思う、ゆえにわれ在り (cogito, ergo sum)」と宣言したことは有名な話である<sup>6</sup>。このときデカルトは、悪しき霊が自分に対してこの世界という夢を見させているのかもしれない、という思考仮説を立てていたが、「この世界の現実私の見ている夢である」という可能性は、否定し切れるわけでもないように思う。

一昔前には、生活場面でこのように考える人がいたならば、大抵は、そういった個人的な妄想を繰り広げるのは結構だが、私たちの眼前にはひとまず合意された現実世界があるのだから、そのことを疑ってみたところで物事はいっこうに進まないし、考えても仕方がないことだろう、と取り合ってもらえなかった話である。けれども、コンピューター・テクノロジーの急速な進歩と人工知能 (AI) の発達によりサイバースペースにリアルな「仮想現実 (virtual reality)」の世界を作り出せるようになり、実際に視覚と聴覚による仮想現実の体験ができるようになってきている今日では、知覚されている現実の優位性について揺らぎが生じてしまうことも稀ではなくなってきた。

ちなみに、仮想現実をテーマにした映画『マトリックス』が公開されたのは1999年のことであるが、ちょうど同じ時期、世紀をまたいだ2001年に、哲学者のニック・ボストロムが、人類がコンピューター・シミュレーションの中で生きている可能性について言及する論文<sup>7</sup>を発表し、これを「シミュレーション仮説 (simulation hypothesis)」と呼んで提唱したが、現在のハイテク産業を牽引している有力者の中には、この仮説を支持している者も多数いるようである<sup>8</sup>。

---

6. デカルトの『方法序説 Discours de la méthode』は、1637年に公刊された。デカルトは目に見える世界の实在性について懐疑し、この世界が我々の見ている夢である可能性について言及した哲学者でもある。現代からみると、この世界が仮想現実である可能性を考えた先駆者の一人とも言えるだろう。こうした仮説は他にも散見される。古代ギリシャのプラトンは、『国家』第7巻においてイデア論を展開するために「洞窟の比喩」を用いて、われわれが現実だと思っている世界はイデア界の影 (仮現) にすぎないと述べている。また、1980年代に哲学者ヒラリー・パトナムが、意識とは何なのか、あるいは言葉の意味や事物の实在性について議論する上で、「水槽の中の脳 (brain in a vat)」という比喩を提示したことも想起される (ただし、この議論は、脳が世界を生み出しているという仮説が前提になっている)。

7. Nick Bostrom: Are you living in a Computer Simulation? Published in *Philosophical Quarterly*, 2003, Vol.53, No.211, pp. 243-255. (First version: 2001)

8. 以下の本が参考になる。Rizwan Virk: *The Simulation Hypothesis ; An MIT Computer Scientist Shows Why AI, Quantum Physics and Eastern Mystics All Agree We Are In a Video Game.*

一方で、もしこの世界の現実が夢であるとする仮説が成り立つのだとすれば、今度はこれを逆手にとって、睡眠時に見る夢の世界というのもまた、この世界の現実と同等の価値や意味をもった実在であるという可能性も否定し切れないのではないだろうか。(すなわち、逆もまた真なり、である。)

とはいえ、常識的に考えれば、現実と夢とでは、決定的な差異があると言わざるを得ないだろう。国語辞典を引いてみれば、夢という言葉には、「現実からはなれた、実体をもたない、不確かなもの、はかなく頼りないもの」といった意味が書かれている<sup>9</sup>。要するに、現実とは異なっているからこそ「夢」と表現するのであって、一般的な日本語の使われ方からしても、夢と現実とはほとんど対義語に近い。現実というのは他者と共有していることが互いに確認でき、持続性や客観性をもっているが、夢というのはあくまで主観的で自己完結しており、しかも睡眠時という通常の意識レベルとは異なる状態で起こる現象である。つまり、夢を見るという現象は、覚醒時のように外界からの刺激への反応として起こるわけではなく、どこまでも脳内で作られたビジョンであって、幻覚やせん妄と同じ原理である、といった考え方になる。ただし、こうしたものの見方(常識とされる見方)もまた、素朴実在論が前提になっている。

科学主義の立場から夢を究明する場合であっても、同じく素朴実在論を前提にしている。睡眠から目覚めた直後に、夢の内容を聴取してこれを記述する。あるいは、脳波測定器やfMRIを用いて、睡眠時の脳波の動きや脳内の活動や機能などを解析して記録する。こうした実験的な手続きにより、夢がレム睡眠の状態のときに脳内で起こりやすい幻影現象であることが実証できる。と、科学的には夢はこのように説明される。また、夢に現れる様々なビジョンは、これまでの人生の中で経験した出来事や想像したことの記憶情報がランダムに組み合わせられ再構成されたものであって、脳内の神経回路の情報処理の結果にすぎない。このように、夢というのはどこまでも脳内の現象であり、実体をもっているわけではなく、その意味で実在している世界ではないことになる。

ところが、素朴実在論という前提からいったん離れて、脳内現象としてではなく、夢を見ている主体意識の側から捉え直してみると、夢の世界はまったく違うものとして映ることになる。明晰夢<sup>10</sup>のように夢の中で自分が夢を見ているという自覚が起こる場合

---

Bayview Books, 2019. (竹内薫・二木夢子訳『われわれは仮想世界を生きている AI社会のその先の未来を描く「シミュレーション仮説」』徳間書店、2021年。)

9. どの辞書でもかまわないが、インターネットでweblio辞典やgoo国語辞書などで「夢」の項目を検索すれば、同じ意味が書かれている。

10. 明晰夢(Lucid dreaming)とは、睡眠中に自分が夢を見ているという自覚のある夢であると定義される。この夢では意識主体が夢の中にいるという理由から夢の状況を自分の意志で操作したり変化させたりすることができるという。明晰夢を見る方法なども様々に考案されていたり、その方法で明晰夢を娯楽などに応用できるのではないかと考えられたりしている。明晰夢は夢の脳内現象仮

は例外として、夢を見ている主体意識は、夢の世界を夢であるとは考えず、実在性のある一つの現実として認識している。この認識は夢から醒めて、夢だったのかと気づくまで続くことになる。そうすると、主体意識にとって夢の世界の現実と覚醒時の世界の現実との明確な区別をつけるということは、それぞれの世界に没入している限り基本的に不可能ということになるだろう。

古代中国の思想家である荘子の「胡蝶の夢」の説話では、蝶になって飛んでいる夢から醒めた荘子が、「私が蝶になった夢を見ていたのか、それとも蝶が夢を見て私になっているのか」どちらなのか解らなくなったと疑問を抱くのであるが、そのように夢か現実かと区別をつけてみても仕方がないことで、天地自然の道理からすれば夢も現実もまったく同じであるとして、「万物斉同」の思想へと導いている<sup>11</sup>。荘子のものの見方からすれば、夢と現実とは対立するものではなく、夢で見ている世界であっても、覚醒時に見ている世界であっても、等しく同じ価値があり、どちらも実在性をもっていることになる。

そこで、こうした世界理解のあり方を、さしあたり「多元的実在論 (pluralistic realism)」と呼ぶことにする<sup>12</sup>。多元的実在論に立って考えてみると、ここで注目したいのは、多元世界のそれぞれを形作って意味を構成している夢の世界の現実と覚醒時の世界の現実とはどのような関係にあるのか、ということである。二つの現実を認識し経験している私という主体意識からすれば、二つの世界の現実とは「非連続の連続」として捉えられる。夢から醒めるという状態を契機として、二つの世界は切り替わる。悪夢を

---

説を裏づけていると見做されるが、しかし、そもそも夢の世界自体が何であるのかが実際にはわからない中で、これをコントロールできると考えてしまうことの危険性はないのだろうか。単純に脳が入眠状態にないだけであり、睡眠障害の可能性も指摘されている。

11. 『荘子』内篇 齊物論第二 金谷治訳注『荘子』岩波書店・1971年、p. 88-89

12. 多元的実在論という用語自体は、ひとまず筆者の造語である。とはいえ、この考え方にオリジナリティがあるわけではない。ベースとなった考え方として、まずは現象学的社会学者のトーマス・ルックマンとピーター・L・バーガーが提唱した社会構成主義に基づく「多元的現実論 (Theory of Multiple Realities)」を挙げることができる (Berger, Peter, L. and Lookmann, Thomas: *The Social Construction of Reality*, Penguin University Books, 1966. 山口節郎訳『現実の社会的構成』新曜社・2003年)。ただし、ルックマン＝バーガーの場合、あくまで社会的現実のレベルであり、夢の現実までは含めていないようである。さらに、近年のドイツの哲学者マルクス・ガブリエルが構想する「新実在論 (Der Neue Realismus)」の考え方が参考になる (Markus Gabriel: *Warum es die Welt nicht gibt.*, Ullstein, Berlin, 2013. 清水一浩訳『なぜ世界は存在しないのか』講談社選書メチエ・2018年)。ガブリエルは、存在を包括する「世界」自体は実在しないが、個々の「事実存在」は実在しているし、実在として認めなければならない、という立場を主張する。事実存在とは、客観的な対象を指すのではなく、あらゆる主観のレベルで対象となる現実の一つ一つを指している。その中にはインターネットやゲーム、アニメやドラマのキャラクターなども含まれる。イメージーションの世界もまた実在の範疇に入るという考え方であり、夢の世界も同様である。

見ていた主体意識を想定してみると、夢から醒めて、ああ夢でよかったと安堵し、そこから覚醒時の世界に戻ってきた感覚になる。このとき夢の世界の現実との連続性は途絶える。しかし、主体意識からすると、戻ってきたこの世界の現実の中で、夢の記憶を通して連続している。

夢の世界の現実に没入している間は考えることはないが、夢から醒めた後で夢の内容（つまりは夢の記憶）をふり返ったときに、その夢にはどんな意味があるのだろうかと考えることもある。その意味とは、この世界の現実を生きる主体意識にとって、夢の世界の現実がどのように影響しているのかを見出すことである。夢の意味を求めるアプローチの典型を、深層心理学（もしくは力動心理学）の夢分析に見ることができる。夢分析では、夢を無意識の象徴（symbol）として理解し、心の深層が反映されていると考える。つまりは、夢の世界が無意識の領域において実在していると捉えるのである。この場合の「実在（reality）」というのは、何らかの力動的なエネルギーの場（無意識の場）が構造的なはたらきとして実効的な力をもっていることを指す。フロイトはこの実在性を「リビドー（libido）」と理解し、ユングアンたちは「元型（archetype）」と呼んだ。この点で、深層心理学というのは「多元的実在論」に立っている（あるいは無自覚に開かれている）と言うこともできるだろう。

ただし、深層心理学は、夢の世界の現実をあくまで「象徴（symbol）」として解釈するのみである。無意識の願望を充足するために、あるいは意識への補償やバランスを取るために、夢という形式をとって象徴的に表れてきたものと考えるのであって、夢の内容や夢の世界を直接そのままに起こってきた既成の現実として理解することはしない。夢から覚めてみれば、その世界は個人の記憶の中にあるのみであり、夢とは心の現象の一つであると考えたからこそ象徴の解釈を行うのである。ところが、夢を見ている主体意識、つまりはその世界自体を夢だとは思ってはいないという夢の主体構造の原点に立ち返ってみるならば、その世界は象徴として表現されたものではなく、何らかの「事実性（factuality）」を伴った実在である、とする理解であっても十分に成り立つのではないだろうか。

このように多元的実在論では、実在の捉え方として、それぞれの世界がそれぞれに固有の実在性をもっているものであり、実在それ自体も多様であるとする見方を示している。次節では、実際に夢の具体的な事例を取り上げて、夢の世界の実在性についてもう少し掘り下げていくことにしたいと思う。

### 3. 生と死の境界

夢の世界の現実とは、覚醒時の生活世界の現実と比較すると、奇想天外であるとか、荒唐無稽、不可思議、神秘的、カオス的、ファンタジック（幻想的）などといった形容表

現で、そのストーリーが語られることがしばしばある。もちろん、夢の世界の中では、覚醒時の現実とさほど変わらないような日常風景が現れることもあるが、その場合でも随所に奇妙な状況が含まれていたりする。なぜ夢の現実が覚醒時の現実と大きく異なるのか。このことを脳科学的に説明することは可能であるとしても、それはあくまで素朴実在論を前提にした仮説であって脳内現象としての幻覚や幻想とする解釈の域を出ない。そもそも夢の現実が奇妙に見えるのは、基準を覚醒時の現実に置くからであって、多元的実在論の立場から夢の世界にもその実在性のもつ独自の構造原理があるのだと考えるならば、それ自体としては何も奇妙なことはいはずである。

そこで、夢の世界の独自の構造原理を捉えるために、ここではテーマがある程度はつきりしており、メッセージ性が強いと思われる夢について考えてみたいと思う。最初に取り上げるのは、大学で筆者の講義を聴いていた一人の学生が報告してくれた夢である<sup>13</sup>。この夢では「生と死の境界」がテーマとなっている。

私は、祖母と一緒に、老人がたくさんいる部屋にいた。その老人たちはみんな部屋の中にあるソファにそれぞれ座っていて何かを待っているようだった。私の祖母もその近くにあるソファに近づいて座ろうとしていた。それを見た私は、(祖母がソファに座ることに)何か嫌な感じがして、祖母に向かって「そっちじゃないよ、違うところに座ろう」と声をかけ、老人たちから離れて、別の場所にある誰もいないソファへと誘った。

学生によると、この夢は、ここに登場している祖母が亡くなる直前に見たもので、ここで夢から覚めたのだという。夢を見たとき、祖母は入院していて、実際にもう長くはないだろうと伝えられていた。そのために、祖母との別れの時が近いのだとこの学生自身は感じていた。夢を見てほどなくして、祖母は亡くなった。この学生は祖母の看取りの場面には立ち会っていない。夢について、夢見手である学生は次のように解釈している。「この夢を見た後、もしかしたらその座っていた老人たちはすでに死んでいて、私たちがいた部屋は死後の世界の入口だったのではないかと感じた。もしかしたら、祖母は、亡くなる前に夢を通して私に会いに来てくれたのかもしれない。これは死後の世界への見送りの夢だったのかもしれないと思えた」。

---

13. 本稿は3つの夢の事例を取り上げているが、これらはインタビュー調査を実施した上で収集した事例というわけではない。事例を提供してくださった方々はあくまで筆者が個人的に知り合った者であり、筆者と会話する中で偶々聞いた夢の話である。とはいえ、いずれの事例の内容も創作ではなく提供者が実際に見た夢であることを確認している。また、事例を取り上げるにあたって事例提供者には論文掲載に関する許可を取っているが、倫理的配慮として事例提供者個人が特定されるような情報は一切載せていない。

この夢の解釈は、ここに現れている夢の世界の現実をどのように理解したらよいかについての端的な回答を示している。すなわち、夢に出てきたこの部屋はまさしく死後の世界に往くための待合室だった、ということである。学生から夢の語りを聞いた筆者も、この解釈で妙に納得がいったように感じた。とはいえ、そうであるとするならば、つまりはこの夢の世界に事実性があるとするならば、いくつかの疑問が湧いてくることになる。

まず、生と死の境界上にあると思われるこの部屋は、実際にどこかの空間に存在しているのだろうか。それから、ソファーに座って何かを待っていた老人たちは、亡くなったばかりの人たちなのだとすると、この老人たちは肉体があるように見えるけれども、本当は肉体を持たない精神的な存在なのだろうか。さらに言えば、夢見手の学生も、そして学生の祖母もまた、この夢を見ている時点では、肉体を持ってまだ生きているのであり、にもかかわらず、生と死の境界であるこの部屋に居合わせているということは、彼女たちもまた肉体を離れた精神的な存在になっていたということなのだろうか。

これらの疑問に対して、正解を示すことは困難である。ただし、夢の世界とは、私たちが生きているこの世界のように物質によって構成されている世界ではない、ということはいえそうである。憶測ではあるものの、これは純粋に精神的なものによって構成されている世界なのではないかと考えられる。実際に夢の中に没頭している間は、そこで感覚されている世界が何によって構成されているか、物質なのか精神なのかと考えることはまずないわけであるが、覚醒時の世界と比べてみたときに、夢の世界が純粋に精神的な世界だと捉えることで辻褃が合うように見えるわけである。とはいえ、夢の世界が精神的な世界であると仮定したとして、ここで最も重要だと思われるのは、夢の世界で経験した出来事というのが、夢見手にとってはどんな意味をもっているのか、ということである。

この学生の場合であれば、それは祖母との別れであり、死後の世界への見送りということになるだろう。夢の出来事の意味を考えていくと、その夢のテーマが明確に感じられるほどに、そこには強いメッセージ性が帯びてくる。この夢を見た後で祖母が実際に亡くなったという事実は、もちろん学生が祖母との別れが近いと予感していたということもあるが、この夢自体のメッセージとして、生から死へと移行する境界を夢見手に示すことで死の向こう側の世界を暗示させ、そこに目を向けることを夢見手に促しているとする解釈を可能にしている。

「生と死の境界」というテーマに関連して、今度は20代後半の女性の夢について取り上げてみようと思う。この夢はこの女性の父親が亡くなる直前に見たものである。

入院先の父のベッドの脇で、私は頭をうつぶせにして泣いていた。ベッドに寝ているはずの父が自分の傍で、元気な姿で立っていた。病院のパジャマでは

なく、スーツを着ていた。紺色のスーツをはっきり着ていた。顔をあげようとしたら、頭をポンポンとさされて「もう泣かないでいいぞ」と言っていた。父に何か話しかけようと思ったら、父は後ろを向いて、その向こうにあまりにまぶしい黄金の光が輝いていた。父は、そこへ歩いていった。独りで、光の中へと消えていった。

女性は、入院している父親の見舞いに行き、(女性はこの時、父親が亡くなるとは思っていなかったが) 亡くなる前の最後の会話をしたその日の夜に夢を見た。夢から目覚めたと感じられた時には、本当に夢だったのか、その実感が全くなく、夢と現実との区別がついていなかった。現実で起こった出来事のような感覚であったという。そして、「父はもうこの世にはいないんだな」という思いがしばらく漂っていた。実際はこの時点ではこの女性の父親はまだ亡くなっていなかったが、死を予見していたかのように、父親はこの2日後に亡くなっている。女性は父親の死に立ち会ってはいない。女性はこの夢を思い出すたびに涙が出てくるとも語っていた。

この女性の経験した出来事は、夢というよりは、一種の神秘体験に近いものとして理解したほうがよいのかもしれない。とくに女性が見た、父親がまぶしく輝く黄金の光の中へと歩いていき消えていった、という死後の世界への帰還を彷彿とさせるような光景は、臨死共有体験（もしくは共死体験、Shared-Death Experience）を思い起こさせる。臨死共有体験とは、臨死体験（Near Death Experience）の研究者であったレイモンド・ムーディが、死に瀕している人に臨死体験が起きているときに、その病床で付き添っている健康な人々にも体験の一部が共有されることがあるという事実に着目して、いくつかの事例を報告したことにより明らかになったものである<sup>14</sup>。共有される体験の具体的な内容としては、空間が変容して見える、神秘的な光に包まれる、神秘的で美しい音楽が聞こえる、一緒に引き上げられる感覚を持つ、別次元の世界（天的な世界）の領域が開かれる、遺体から上がる霧のようなものを見る、などといった現象が挙げられる。

臨死共有体験の場合、基本的には死に逝く人と周囲にいる人々とが同じ空間を共有していることがほとんどであるが、ムーディが報告する事例の中には、物理的に空間を共有していない人が、夢やトランス状態の中で、元気な姿の死に逝く人と出会い、会話をしたり、何かと一緒に経験したりした後に、別次元の世界（死後の世界と考えられる）へと去っていくのを見送る、という体験も見られる。この体験はテレパシー（遠隔精神感応）によって生じたものではないかと推察されているが、むしろこれは実在性を持つ

---

14. Raymond Moody with Paul Perry, *Glimpses of Eternity: Sharing a Loved One's Passage from This Life to the Next*, Guide-posts, 2010. ; *An investigation into Shared-Death Experiences*, rider, 2011. (堀天作訳『永遠の別世界をかいま見る 臨死共有体験』ヒカルランド・2012年)

た精神的な世界の中で起こった出来事であり、その世界において、死に逝く人も、共有体験をしている人も、精神的な存在として居合わせているとして、多元的実在論の視点で考えたほうが、筋が通るようにも思われる。

ひとまず夢というものが、脳内現象としての幻想や幻覚ではなく、何らかの実在性もっていると考えられる事例として、とりわけ「生と死の境界」をテーマとした二つの夢の事例を中心に考察を進めることによって、夢の世界の現実、純粋に精神的な世界として実在する、という構造原理を見出すことができた。次節では精神的な世界である夢の世界の現実と物理的に実在していると捉えられる合意的世界の現実とが深く交差していることを、事例に即しながらさらに考察していきたいと思う。

#### 4. 夢の世界は現実であり実在している

私たちが素朴実在論に立って、この世界は、たった一つの世界であり、一定の物理法則のもとで合理的な秩序をもった形で実在していると考えるのは、多くの他者と一つの世界の中で共に生きているという暗黙のうちに感じ取っている共通感覚のもとで、合意的に了解しているからである。もしもこの共通感覚が見出せなくなってしまうならば、一つの世界を他者と共有しているとは感じられなくなるのであり、他者との交流も失ってしまうことだろう。これは哲学的には「独我論」と呼ばれる事態である<sup>15</sup>。精神病理学から見れば、統合失調症、自閉症、離人症、解離性障害、認知症などの精神疾患において起こり得る症状であり、正常ではないと判断される。合意的な世界の現実、通常の意識からすれば揺るぎない自明性をもっており、この共通感覚が喪失したり逸脱したりするような場合には病理と見做されるのである。たとえば、幽霊が見える、死者と会話できる、神の声が聞こえるなどと言う人がいるとすれば、合意的な世界での認識からすれば異常な精神状態なのであり、幻覚、幻聴、妄想、虚言、狂気といった類いとして扱われてしまうわけである。

夢についても同様であり、普通に夢を見る程度であれば合意的な世界の範疇から逸脱してはいないが、たとえば悪夢障害のような重篤な症状を引き起こすような夢を見続けている場合には、精神状態に何らかの異常が起きていると判断されることになる<sup>16</sup>。悪

---

15. 渡辺恒夫『自我体験と独我論的体験—自明性の彼方へ』北大路書房・2009年

独我論自体は、精神病理とは言えない。哲学的思考として独我論を構想することは可能である。自分だけが感情や思考をもっており、他者の心情などに共感が全く起きず、ロボットのように見えるなどの感性は、客観的に見て病理的に感じられるが、そのような心の現実があることは認める必要があるだろう。

16. 西多昌規『悪夢障害』幻冬舎新書・2015年

悪夢障害は重篤なものになると他の精神疾患を併発している場合が多いようである。

夢障害では、恐怖や不安を感じさせるような幻想が、覚醒時の世界でも影響を及ぼし苦しみが続いていくことが特徴であるが、これは夢の世界の現実が覚醒時の世界の現実を浸蝕している典型的な例である。とはいえ、夢の世界と合意的な世界とが強い影響関係をもつこと、それ自体は多元的実在論の立場からすれば、夢の世界の実在性の証明でもある。今から取り上げる夢の事例は、合意的な世界の共通感覚からすれば異常な精神状態と見做されてしまうかもしれない。ただ予め断っておくが、この語りを直接に聞いた筆者の判断では、夢見手は正常な精神状態の持ち主であることを確認しておきたい。むしろ正常な精神状態で見続けた夢であるからこそ、かえって夢の世界の現実が先鋭化していると考えられる事例である。

語り手は30代後半の女性である。この事例では、個別のストーリーをもつ夢の内容を扱うのではなく、昏睡状態に陥った母親との夢の中での会話や交流が一定期間続いたという稀有な内容を扱っている。彼女の語りは以下のようなものである。

私の母は、脳梗塞を発症して倒れてしまいました。この時は一命をとりとめましたが、昏睡状態が3ヵ月ほど続きました。その後、意識を取り戻したのですが、脳の言語野がやられてしまっていたので、リハビリしてもしゃべれるようにはなりません。それに、こちらの言葉もどこまで理解しているのかわからない状態でした。認知症の人がたまに正気に戻ることがあるみたいに、そんな感じで正気に戻るとはときどきありました。その時は、こちらの問いかけに頷いたり、自分から何かを伝えようとしたりする様子は伺えました。意識はあるんだなあとは感じられたけれど、意思疎通はほとんどできないし、交流は成り立たない、そんな状態だったのです。

母が昏睡状態になってすぐに、私は夢を見るようになりました。夢の中で、お母さんが一人だけ出てくる。会話をしているけど、お母さんがほとんど一方的にしゃべっている。そういう夢をほぼ毎日のように見ていました。脳梗塞になってから亡くなるまでの3年間、夢を見続けていたんです。

夢の中は、この世界と同じように別の世界が広がっていました。現実とまったく同じ感覚です。匂いなどはありませんでしたが、知らない土地にお母さんがいるって感じでした。母の実家とも違う、田舎のような風景が広がっていて、今住んでいるところの隣町みたいな感じです。そういう場所がいつも変わらずに出てくるんですね。母はすごい元気で、とにかく日常的なことをしゃべっていました。エピソードがあるわけでも、メッセージをもらうわけでもありません。夢の世界に母がいて、私とその夢の中に入って確認するという感じ。しゃべれる母と交流するために、私が夢の中に入る。作業みたいですね。そこで元気な姿の母に会えるから、しゃべれない母と会ったときのバランスが取れ

てみたいいな…。

どういったらいいのか、夢を見ているって感覚は本当にはないんです。その世界を探訪しているような感覚ですかね。起きてみて一応夢だとは認識します。でも、夢という概念がなかったら、どっちの世界も現実だと言っていい感じですね。

けれども、母が亡くなったら、ぴたっと夢を見なくなったんです。とくに不思議には思いませんでした。ちゃんとあの世にいつて成仏できたんだな、よかったな、という感覚でした。

女性は、この世界で昏睡状態となりその後意識を回復したものの言語的なやりとりや意思疎通のできなくなった母親と、夢の世界において普通に会話することができ交流し続けていたのだと語っている。しかも、夢の中でのこの交流は、母親が亡くなるまでの3年間に及んでおり、亡くなると同時に夢も見なくなったのだという。にわかには信じがたいファンタジーのようにも聞こえるが、この語りが事実なのだとすれば脳科学や深層心理学の夢理論ではうまく説明のつかない現象である。しかしながら、女性が自ら語っているように、いったん夢という概念を取り払って考えてみると、これは実在性をもった二つの世界の現実を行き来している状況を伝えていると理解することができ、彼女のアクチュアルな実感を率直にそのままに受け容れるのであれば、これこそまさしく多元的実在論を証明している事例だと言わざるを得ないだろう。

ところで、これに類比しうる事例を見つけることはなかなか難しいが、ここで思い起こされるのは、ユング派の心理療法家でプロセス指向心理学の創始者であるアーノルド・ミンデルが行った、昏睡状態にある患者との直接の交流を試みたコーマ・ワークの実践である<sup>17</sup>。コーマ (Coma) とは昏睡や意識レベルの低下を意味する。昏睡状態に陥っている患者は、うめき声や喘ぎ声を発し、眼球運動などを起こすことがあるが、これらは医学的に見れば無意味な生理的反応であり、身体のかすかな動きも筋肉の不随意運動反応にすぎないと判断される。ところが、ミンデルはこれらの反応にはすべて意味のあるメッセージが含まれていると捉えて、患者とのコミュニケーションを試みようとした。この試みをコーマ・ワークと呼ぶのである。コーマ・ワークでは、患者に寄り添い根気よく観察することで、呼吸のペースの変化や、目の色合い、口の微妙な反応などをつかんでいく。また、患者のうめき声や喘ぎ声から規則性を読み取って同調し、筋肉の微妙な反応に呼応することにも注意を払っていく。これによってセラピストと患者との絆が強まり、同調性や共感性がいつそう高まるのである。ミンデルはこのようにして昏睡状

---

17. Arnold Mindell, *Coma: key to awakening*. Boston: Shambhala, 1989. (藤見幸雄・伊藤雄二郎訳『昏睡状態の人と対話する』NHK ブックス・2002年)

態の患者にコミットし、最終的に死を迎える準備を患者自身に整えさせていくことがワークの目的であるとしている。

コーマ・ワークの前提となっているのは、たとえ昏睡状態や脳に損傷をきたした状態であっても、むしろそのような状態であるからこそ、意識は変性意識状態 (altered state of consciousness)<sup>18</sup> となって活動することになり、コミュニケーションも可能となる、という考え方である。ミンデルはこうした変性意識状態を夢の世界 (Dreaming World) に没入して同一化した状態と捉えている。言うなれば、昏睡状態や脳に損傷をきたした人の意識は、常に夢を見ている状態にあるというのである。

ミンデルの考え方をもとにこの事例を再び検討してみると、女性の母親は、昏睡状態に陥って以来、その後に意識を回復したとしても正気であることは少なく意思疎通も困難な状態であったことから、変性意識状態に入って夢の世界の中で生き続けていたと解釈することもできる。女性は自宅で母親の介護をしていたこともあり、そうした関わりの中で、夢の世界を生きている母親への同調性や共感性が高まっていったのではないだろうか。つまり、この女性は無自覚ながら母親に対してコーマ・ワークを行っていたことになる。ミンデルは、コーマ・ワークを行うセラピストが昏睡状態の患者に同調することでシャーマンのようなトランス状態に入ることを指摘しているが、この女性もまた変性意識状態にある母親と関わることでトランス状態に入りやすくなっていたのではないだろうか。そのために、入眠時において、母親のしている夢の世界に同調し、その世界に入り込むことになったのではないかと考えることもできるように思うのである。

このような考察は根拠のない憶測にすぎず、想像の域を出ないものであるとする批判は当然あり得ると思うが、だからといって、こうした夢の事例を、私たちの合意的な世界の基準に合わせて、異常な精神状態が引き起こした幻想だと片付けてしまうのもあまりに横暴であろう。むしろ、この事例の物語が様々な布置 (Constellation) によって成立していることを考慮するならば、夢の世界の現実には私たちの思惑を超えた意図が多く隠されているのではないかという思いにもなる。とりわけ驚かされるのは、彼女が3年もの間見続けた夢が、母親が亡くなることでびたっと見なくなった、というエピソードである。このことは、この一連の夢が結果的に「生と死の境界」をテーマとして開かれていたことを暗示しているが、しかも、それだけでなく、生の世界と死の世界とを結

---

18. 「変性意識状態 Altered states of consciousness」は、1969年にカリフォルニア大学の心理学者チャールズ・タート博士の編著がもとで有名になった意識状態の定義で、私たちの日常意識状態が合理的・論理的・理性的に構成されているとの前提で、こうした状態以外の様々な意識状態を指す総称である。ミンデルが昏睡状態や脳の損傷状態を指して変性意識状態と呼ぶのは、自我感覚が後退したことによりかえってセルフ (自己) の本質が顕現しやすい状態となり、ドリーミングの流れが直接的であるような状態を捉えていると思われる。この状態でコミュニケーションが可能とするところにコーマ・ワークの特色がある。

びつけ媒介する世界として、夢の世界が実在しているという世界構図を描くことをも可能にしている。要するに、多元的実在論が示している現実のあり方とは、複数の多様な世界が交互に重なり合いながら実在している、という構図にほかならないのである。そこで最後に、この問題について「現実」についてのレベル構造という観点から捉え直すことで、本稿のまとめとしたいと思う。

## 5. おわりに

「夢」という言葉の語源を探っていくと、古代の人々が夢という現象に対してどのような意味を見出していたのかがわかる。夢という漢字の原型となる甲骨文の字形を見ると、これは「眉を太く大きく描いた神に仕える女が座っている形」を描いているという<sup>19</sup>。シャーマンである巫女が夢を通して神からのメッセージを受け取っている姿から、夢という漢字が成立した。夢告という言葉が残っているように、夢とはもともとは霊的な世界からの宣託を意味していたのである。

上代の和語では「イメ」という語源になるが、これに万葉仮名として「寐目」が当てられている。寝ているの時の目は、魂の眼を指す。夢は魂の眼を通して見るものだった。万葉の人々にとって夢の中に入ることは、魂の世界、霊的な世界に入ることだった。彼らは夢の中で、見知らぬ人との逢瀬もできると考えていた<sup>20</sup>。

中世の日本では、夢は神仏からのメッセージと考えられていた。『融通念仏縁起』の絵巻（上巻第二段）には、天空にいる仏から放たれた「きらめく光の筋」が眠っている僧侶のところまで延びている様子が描かれている<sup>21</sup>。夢というのは、神仏の住まう霊的な世界から届けられる。つまりは人知を超えた存在を通して外からやって来るものであった。

近代以前には、夢の体験は覚醒時の現実の体験と次元が異なるものではなかった。むしろ夢の体験のほうが絶大な価値をもっていたのであり、リアリティの密度は高かったのである。ところが、近代になって夢に対するものの見方が一変した。科学主義的思考によって、夢は人間の内部にある心の状態、そして脳内の現象へと押し込められていく。フロイトの『夢診断』が刊行されたのは1900年であるが、ここでは夢は心の深層にある無意識に抑圧された欲望や欲求が象徴的に表れたものとされ、夢を見る人の心の状態と不可分であると考えられている。また、アセリンスキーとクライトマンによってレム

19. 白川静『常用字解（第二版）』平凡社・2012年

20. 佐々木綾「上代日本文学における夢：旅人と家持、その作風の相違」『国文研究45』2000年、pp. 28-37

21. 酒井紀美『夢の日本史』勉強出版・2017年、p. 7-9（『融通念仏縁起』は、『続日本の絵巻21』中央公論社・1992年に出版）

睡眠と夢との関連が実験的に証明され、睡眠科学の幕開けとなったのは1953年のことである。この発見により夢は脳が産み出す幻影であると考えられるようになり、脳の情報処理のために夢を見るという脳内現象仮説へとつながっていく。

今日では、現実の世界の実在性の価値のほうが圧倒的に大きく、夢の世界に実在性を認めるということは、一般的には奇妙なもの見方に映るだろう。しかし、それは心や脳が夢を作り出しているとする前提があって成り立っている見方にすぎない。もしこの世界が仮想現実のように実体がなく作られたものであるならば、夢の世界と何ら変わらないものにならないだろうか。むしろ古代や中世の人々が考えていたように、夢の世界のほうこそ実在性があると捉えるべきかもしれない。

アーノルド・ミンデルは、人間存在の根源に「ドリーミング (Dreaming)」と呼ばれる広大な無意識体が存在しており、ドリーミングを基盤として個々の人間の意識活動、身体活動、精神症状、身体症状などのすべてが発生してくるというユニークな世界観を提示している。ドリーミングは睡眠時に見る夢 (Dream) の体験にももちろん影響を与えているのであるが、興味深いのはドリーミングが起こっているのが睡眠時だけでなく、覚醒している間であっても影響を与え続けているという点である。ミンデルによれば、私たちはみな一日中、24時間ずっと夢を見ている状態なのだ<sup>22</sup>。具体的に描写してみれば、私たちは目覚めているときに、ふと空想にふけったり、気分の揺れにざわめいたり、直感がひらめいたり、身体の部位に奇妙な痛みを感じたりすることがあるが、これらはすべてドリーミングによって発生したものなのである。このようにして、私たちは起きていても寝ていてもいつでも明晰夢の中にいるというのが、ミンデルの主張である。

こうした考え方を背景として、ミンデルは「現実」には3つのレベルがあるとして階層構造をもった図式をまとめている (図1)。まず基底部に存在するレベルⅠの現実には、ドリーミング、ドリームタイムと呼ばれる。これはまたエッセンス (Essence) とも呼んだりするが、言語化できない漠然とした感覚や直観によって構成され、すべての経験を生み出す根源の世界である。次のレベルⅡの現実には、ドリームランド (Dream Land) と呼ばれ、これは夢の領域であるが、睡眠時に見る夢の経験はこの領域で起こっている現実であり、また他者とは共有されない個人的で主観的な心や身体の経験が現れる世界である。そして、レベルⅢの現実には、合意された現実 (Consensus Reality) と呼ばれる世界で、他者との共有が可能であり、客観的な行動や言動、事実などを指し、他者と合意的に了解された現実である。

---

22. Arnold Mindell, *Dreaming while awake: techniques for 24-hour lucid dreaming*. Charlottesville, VA: Hampton Roads, 2000. (藤見幸雄・青木聡訳『24時間の明晰夢—夢見と覚醒の心理学』春秋社・2001年)

この3つのレベルの現実という考え方は、無意識の構造にも類似しているが、特徴があるとすれば、それぞれの現実には、実体 (substance) はないが、本質 (essence) は流れており、どのレベルであっても実在性 (existence) をもっているということである。また、レベルIIのドリームランドの現実とはアクチュアリティのことを指し、レベルIIIの合意された現実とはリアリティのことを指しているとも考えられる。そうであれば、私たちが認識している現実というのは、この3つのレベルの現実が相互に重なり合っているという見方も納得がいくことだろう。

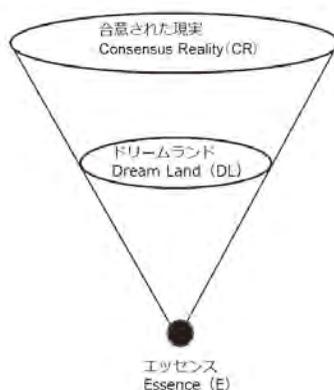


図1 3つの現実レベル

多元的実在論を構想するにあたって、ミンデルの3つの現実レベルについての考え方は非常に参考になる。ただ本稿で扱った「生と死の境界」をテーマとした夢をどのように理解したらよいかについて考えた場合には、夢の領域と呼ばれるドリームランドの現実レベルについて、もう少し補足が必要であると思う。本稿が取り上げた夢の事例が示唆しているのは、生の世界の現実と死（もしくは死後）の世界の現実の中間領域の存在であり、そこは死後の世界の入り口のような場であると考えられる。その意味で思い起こすのは、臨死体験である。臨死体験もまた生と死の境界で起こっている現象である。もちろん本稿での事例は臨死体験と同じわけではないが、臨死体験で見てきた光景をミンデルの3つの現実に当てはめるのであれば、これもドリームランドの現実レベルで起こっている現象なのではないだろうか。同様に本稿の夢の事例もまた、ドリームランドでの現実レベルで起こっていた現象であると思われる。臨死体験の現実にせよ、生と死の境界の夢の現実にせよ、その世界は、私たちの誰もが実在性と認める合意的な現実と同等の価値や実在性をもつと考える必要があるのであり、どちらも純粹に精神的な世界として実在していると言うべきであろう。とはいえ、今日の科学主義的思考に基づく学問領域の方法や概念を用いるだけでは、そうした実在世界を証明したり表現したりす

「夢の世界は現実であり実在している」ことを認める多元的实在論の考察

ることは極めて困難であろうと思う。多元的实在論では、まずはそうした世界の固有の实在性を認めるところから始めていき、さらに体験者の語りを何よりも尊重することによって、体験者たちの語る世界を共有しそこに深い意味を見出していくことを重視する。つまりは、こうした作業を行うことが、学問方法としての多元的实在論の可能性を開くことになるだろうと思うのである。

さかい・ゆうえん  
(仁愛大学)